

「他者」について 安田百合絵

松岡秀明『病室のマトリョーシカ』を興味深く読んだ。文化人類学者・医師などいくつもの顔を持つ作者の生活が歌によって垣間見え、どの連作も濃密な読後感を残す。

・リストカット縫合しつつ思ひをりポール・ニザン著『アデン・アラビア』

・ほの光る聴診器ステトをわれの頬にあて春のかすかな脈拍プルスをさぐる

いわゆる職業詠だが、こうした歌には経験をすでに十分積んだ医師としての余裕が漂う。一首目、「ぼくは二十歳だった。それがひとの一生でいちばん美しい年齢だなどたれにも言わせまい」から始まり、青春の苦さを語るニザンの小説が治療中に想起されている。ここにあるのは共感や同情や憐憫ではなく、おそらく既に青春期を終えた者の冷静な連想が淡々と描出されているのだろう。二首目も「春」や「ほの光る」といった抒情的な語彙が「聴診器」「脈拍」といった幾分専門的な用語とあわせて使われており、その職業へと違和なく同化していることが伺い知れる。

この歌集を読みながら思いついたのは、おなじく精神科医の土岐友浩が二年前に刊行した歌集『Bootleg』である。出版当初から話題になったが、『Bootleg』には職業詠と呼びうるような作品は一切収められていない。後書きに「京都子ども心のケアチーム」のスタッフとして震災後の会津若松を訪ねた際につくったもの、

として紹介されている連作「From F」にも、スタッフとしての仕事の様子が描かれることはない。連作には、

・少年のプロンズ像を撮っている夕暮れどきはまだ先のこと
・梨畑 いま吹いているこの風は色でいうなら何色だろう

こうしたごく日常的な風景が自然なタッチで描かれ、読み手の意識を作者の職業といった個人的属性からは逸らしているように思える。さらに、職業詠のみならず、家族に対する視線にも同じような濃淡の差が見出される。

・肅々と牛の尻尾を叩き切る撫で肩のひとをわが妻と呼ぶ(松岡)
・ふたりではさびしいということが言えなくて花火を見て月を見る (土岐)

松岡の描写には生々しい具体性があり、「牛の尻尾」を「叩き切る」という残酷さと「撫で肩」という女性らしい身体のコントラストが際立つ。一方、土岐の場合には「妻」という関係性すら明示されない。存在するのはあくまでも「ふたり」であり、花火を見て月を見る、という行為からも個別性は慎重に抜き取られている。職業詠を詠まない理由として、土岐は同人誌「短歌ホスピタル」中の座談会で守秘義務を挙げているようだ。しかしそれが原因ではないのだろう。土岐作品の抽象性には、それとは別種の倫理(あるいは美意識)を感じるように思う。強いていうならそれは、自己の世界に他者を導き入れることの暴力性への鋭敏さとも言うべきものだ。「妻」や「患者」と呼び、名付けることによって、関係性からこぼれてしまうものがある、ということこそ土岐は慎重に意識しているのだろう。それを考えて読みかえすとき、「ふたり」という語はすこし切なくも見えてくる。